

1987.1.25

1987.1.25

原点を見つめて③

「こん、ことて いの、わ」

飛田 雄一

私もむくげの会の創立メンバーの一人だが、会のスタートの頃を「原点」と言うならその頃、一九七〇年の頃のことを考えなければならないだろう。今も若いが一と、書いて少し恥かしい年になつてきたが一そん頃は本当に若かつた。一九六九年に大学に入つて学生運動を先頭から二、三列目くらいで頑張つていた頃に、ベトナム反戦運動があり、私も「ベ平連神戸」のメンバーとして主に神戸の三ノ宮地下街を中心うろくしていった。ベ平連神戸としては当時、任錫均事件、丁勲相事件などがあり、わりと在日朝鮮人問題には関心があつた。また一九六九年に出入国管理法案が上程されたりして、在日朝鮮人問題が主に「入管闘争」として鬪われていた。

「論理」はわりと簡単だった。ベトナム戦争は決して遠い国の出来事ではなく例えは、日本の沖縄から米軍の爆撃機が飛び立つていてることを見ても、日本は加害者の立場にあり、その日本は、国内においては部落・沖縄出身者、在日朝鮮人・中国人を差別しており、その構造は表裏一体のものとして

ういわれればそうだが一、在日朝鮮人問題あるいは朝鮮史という重いテーマを勉強してゐるに軽薄だ、という誤解をうける結果ともなつてゐるようである。

気負いがなくなつたのは、自分が日本を代表できるわけがないという当たり前のことに気づいたこともあるだろうが、大きいのは朝鮮そのものが「いいもの」であったといふことである。無理してボリアンナ物語の「よかつたさがし」ではないけれど、朝鮮のいいものを頭で見つけ出すということをしなくても、いいものがバラバラと見つかってきたのである。いわば、無理して朝鮮のいいもの搜すという朝鮮に対する偏見から抜け出せたのだと思う。

あとは惰性だった、と言えばこのエッセイはこれで終わってしまうのでもう少し「原点を見つめて」にふさわしく反省したいと思う。

『むくげ通信』の一〇〇号ということ今までの通信で自分の書いたものを見てみると偏つてゐるのである。どうゆう偏りか。それは私の書くテーマがワン・パターンなのである。『むくげ通信』の編集は、これ以上は考えられないといふ番制になつてゐる。従つて各コーナーをまんべんなく書いていることになるが、私の場合そうではないのである。例えば通信の特徴の一つになつてゐる「権域」というコーナーがあるが、私はこれを一回しか書いていない。ついこの間「朝鮮の胡麻」を書いただけだ。また、史料、人物朝鮮史などはま

ある。ベトナム反戦闘争はすなわち国内における差別抑圧体制に反対する運動である、というようなものだつた。

一九七〇年五月に、このよだな論理をおそらく前提にして「差別抑圧研究会」がベ平連神戸内(?)の一つの研究会として生まれ、それが翌七一年一月にむくげの会になつた。当時の私はいろんな意味において観念的であつた。例えば、ある

強烈な個性の在日朝鮮人が私の目の前に現れるとその朝鮮人を日本にいる在日朝鮮人の代表であるかのように考へてしまい、一方、私も日本人の代表であるかのように錯覚して出来もしない「代表」を勤めたりした。そして次にまた別の個性の在日朝鮮人が現れたらまた同じようなことを繰りかえしたりして、自らこれは一体どうゆうことか、などと考えたりしていた。また、当時、朝鮮語や朝鮮史をそれなりに勉強したが、かなり無理やりなもので、朝鮮そのものに接する余裕がなく、差別・抑圧されている朝鮮を決してマイナスのものではないということを自らに納得させるために勉強していくたといふ感じだつた。こんな勉強は変なもので、よく考へれば朝鮮に対する侮辱である。いいとこのない朝鮮のいいとこを、無理やり搜してあげようというようなものだ。こういう感じで勉強していいた頃は、一方では非常に氣負つていて、日本人の朝鮮に対する歴史的な負い目を一人で晴す(?)かのようない意気ごみをもつて臨んでいたのかもしれない。

ある時期にこのよだな氣負いがなくなつた。これはいいことだと思うが、一面でむくげの会が好きものの集団で一そ

あまあ書くがノレ(うた)のコーナーは本当に数えるほどだ。でもほぼ毎号いろいろ書いていたわけだがよく見ると、何と言つても「時評」が多い。会の中ではダントツである。通信全体のバランスの上からはいいことかもしれないが、私自身のバランスとしてはすこぶるよくない。「小説オンチの飛田」とか、「割きりの飛田」とか言われているが、どうも情緒的な側面が不足していることは否めない。今後の私の課題であると思う。それにしても歳をとるにつれてだんくと一年が短くなるというが、どうもそのようになつてきているようである。むくげの会をめぐるいろいろな仕事はそれなりにペースがきていて、とくに忙しくなつたということはない。むしろ会員の高年齢化を反映してペースダウンしているだけである。しかし一般的な世間の仕事をなんやかんようと引き受けなければならない世代になつてきていて忙しい。私の職場は神戸学生青年センターだが、ある人は一般的な仕事ではなく飛田は好きなことができて、趣味と実益をかねて楽ししそうにやつてゐる、というが決してそうではない。それなりにいろいろあるのである。そもそも三七歳になるが、これまでついていつたらよかつたことがそうでなくなり、それなりの責任ある地位(?)につかなければならなくなつたのである。

もともと付き合いが良すぎる面もあってこうなつてることもあるが、いくつかの研究会に参加することだけが精一杯で勉強することがないということをイライラしながら反省している今日このごろです。